

ギヤスケルの「ジョンソン」 ——言語、語り、出版文化——

原田 範行

1. 「ジョンソン」、その後

18世紀イギリスの文人サミュエル・ジョンソンに対する評価が、没後、今日に至るまでにたどった推移は、19世紀以降のイギリス文学史や文化史を考える上で興味深い論点を提供してくれる。「存命中は、ウルサ・マイヨール（大熊星座）などと称され、文壇の中心人物と考えられていたジョンソンへの評価は、19世紀になると、その偏頗とも思われる文学観によって低落するが、19世紀末から20世紀にかけて再評価された」——広く定着しているのは、おそらくこうした見方であり、実際、このようなジョンソン観を裏付ける証拠とおぼしき言説は少なくない。¹ 例えば、トマス・カーライルは、その『英雄崇拜論』（1841）の中で次のように述べている。

かつては広く読まれ賞賛されていたジョンソンの著作も、今の若い世代には認められていないようだ。²

トマス・マコーレーによる『ブリタニカ百科事典』の記述もまた、ヴィクトリア朝におけるジョンソンの不人気を端的に示したものと言えよう。

彼が亡くなってからというもの、その作品の人気は、『イギリス詩人伝』と、それからひよっとすると『人間の願望のむなしさ』を除いて、ひどく衰えた。彼の英語辞典は、多くの編者の手によって、彼のものとはほとんど呼べないほどに変わってしまっている。『ランブラー』や『アイドラー』に言及しても、文学仲間できさ、なかなか分からなかったりする。あの『ラセラス』の評判できさ、いささか陰りが見られる。³

こうした19世紀のジョンソン観は、ドライデンやポープといったいわゆる新古典主義のほかの文人たちへの再評価とともに、19世紀末から20世紀にかけて、いさ

さかノスタルジックな18世紀観の中で変化していくことになる。レズリー・ステイーヴン、W・J・コータップ、G・M・トレヴェリアンなどの歴史家、文学研究者の名前をこの流れの中で指摘することができるが、ここでは、T・S・エリオットの次のような印象的な言及を引用しておこう。

もし私たちが、ちょうどジョンソンのように、比較的統一のとれた時代、一般にある程度の共通認識が存在するような時代に生きているのであれば、芸術的価値を正当に評価するのに今日ほどあれこれ悩む心配はないであろう。私たちの生きている世界の性質について、またその世界における人間の位置づけや人生について、そしてまた学識であるとか、個人や社会にとっての善い生き方についてであるとか、そういうものに関して考え方が一致しているのであれば、私たちもジョンソンと同じく、自信を持って詩に対する道徳的な判断基準を示すことができるのだが。⁴

18世紀の出版文化においては、作者と読者がある種の幸福な共存関係にあったのだが、それが19世紀に入って分断されてしまった、それゆえ、19世紀にあつてはいささか等閑視されてきた、ジョンソンのような18世紀の作家と作品をもう一度確認したい、というわけである。18世紀英文学研究も、こうしたエリオットの18世紀観の延長線上の、少なくともその一部に多少なりとも重なり合ってくることは否めない。⁵

もともと、具体的にジョンソンの何が、19世紀においては魅力を失うことになったのか、19世紀以降の文学と社会の特質ともかかわるいかなる理由が、そこに考えられるのか、という問題は、先のカーライルやマコーレーの引用を見ても必ずしも明らかではない。「比較的統一のとれた時代」とか「ある程度の共通認識」というエリオットの言にしても、それがジョンソンの時代に対する一つの卓見であるにしても、それでは、そうした「統一」や「共通認識」がどのような経緯をたどって瓦解したのか、その詳細は定かではない。本稿では、このような問題意識のもとに、ジョンソンの著作と少なからぬかかわりを有していたと考えられるエリザベス・ギヤスケルの作家的経歴と作品、特に『クランフォード』を考察し、ジョンソンの受容という観点からヴィクトリア朝の文学的・社会的動向の一端を明らかにしようとする試みである。

2. ヴィクトリア朝におけるジョンソン受容のねじれ

ヴィクトリア朝文学にあつて、ジョンソンの不人気をきわめて象徴的に描いていると思われる作品の一つは、W・M・サッカレーの『虚栄の市』(1847-48)であろう。アミーリアとともにチジック・モールの女学校を去るベッキー・シャープは、こともあろうにジョンソンの辞書を平然と馬車の窓から投げ捨ててしまうのである。⁶ もちろんここには、そうしたベッキーの軽率さへの批判的含意があるわけだが、しかし、辞書を投げ捨てたこと自体が彼女のその後の人生において致命的であつた、というわけでもない。投げ捨てられることはもちろん、さして致命的ではないできごとの中に、ジョンソンの代名詞とも言える辞書が使われていることこそ、その不人気をよく表していると言えよう。

しかしここで注意しなければならないのは、ベッキーの投げ捨てたジョンソンの辞書がどのようなものであつたのかという点である。むろんそれは、浩瀚な初版を想起させるフォリオ版ではないだろうし、また当時一般に流布していたクォート版でさえもないであろう。ベッキーが馬車から投げ捨てるには重すぎるからだ。内容的にはおよそジョンソンの『英語辞典』からはかけ離れた、タイトルにのみジョンソンの名を冠した廉価な簡略版であつたはずである。おびただしい数のそういう簡略版が、19世紀には続々と刊行された。「彼の英語辞典は、多くの編者の手によって、彼のものとはほとんど呼べないほどに変わってしまった」というマコーレーの指摘は、この意味で正しい。だが他方で、この『虚栄の市』の出版とほぼ時を同じくして、ロンドン英語協会が組織され、ジョンソンの『英語辞典』の本格的な補遺としての英語辞典編纂(後のOED)が構想されていたという事情を見落としてはなるまい。⁷ つまり、ジョンソンの辞書を馬車の窓から投げ捨てるベッキー・シャープの姿には、ベッキーの軽率さや古くさい知識人の象徴としてのジョンソンの不人気とともに、しかし実は、ヴィクトリア朝にあつて、そもそも大衆的志向とジョンソンの学識とが乖離し始めていたことが示されているのである。ジョンソンの不人気は、19世紀になって新たにその存在感を増しつつあつた大衆的志向とジョンソンの文学との一種の不適合に原因があり、それが、しかし全体としてはジョンソンへの評価の低落という形に見える、ということなのではあるまいか。

このような乖離、19世紀のジョンソン受容における二重性は、マコーレーの指摘する他の現象についても少なからずあてはまる。例えば、マコーレーは、「あの『ラセラス』の評判でさえ、いささか陰りが見られる」と述べているが、それがヴィクトリア朝中期における一般的な『ラセラス』受容についての、ある程度正確な記述

であるとしても、実際には、初版刊行以来一世紀以上を経た 1860 年代にあっても、『ラセラス』は、ウィリアム・ウェストやジョン・ハンターによって編纂された各種版本、あるいは「ベーンズ・キャビネット・エディション」と呼ばれたシリーズの一冊として、ロンドンだけでもほぼ毎年、新版が出版されていた。⁸ そのことは、少なくとも 18 世紀におけるこの作品の受容と読者数との比較に関する限り、決して減少や「陰り」を意味することにはならない。「陰り」というのは、むしろ、著しく増加した新しい読者層を含む全体の中で相対的に算定されたものであると言うべきであろう。逆に、マコーレーが、ジョンソン作品にあつて例外的に人気の衰えていないものとした『イギリス詩人伝』についても、こうした状況を勘案する必要がある。ジョンソン最晩年のこの大作は、52 人の詩人に関する伝記と評論を集成した大部なものであるにもかかわらず、ヴィクトリア朝にあつても一定の人気を維持し、実際、1800 年から 1900 年にかけての一世紀間に主なものだけでも 25 種類の版本が出版された。⁹ 平均して四年に一度、新版が刊行されていたということになる。この意味で、マコーレーの指摘はここでも正しい。だが、ヴィクトリア朝における『イギリス詩人伝』として、おそらく最も知られ、読まれたのは、マコーレーの死後、1878 年に刊行されたマシュー・アーノルドの編纂による『イギリス詩人伝』の抄録版ではなかったか。実は、そういう抄録版への流れが、19 世紀初頭から存在したこともまた事実である。¹⁰ ヴィクトリア朝の読者は、そうした抄録版、簡略版を強く求め、それを読み、消費していたのである。マコーレーは、不人気に陥ったジョンソン作品から『イギリス詩人伝』を除外したけれども、『イギリス詩人伝』受容の実態は、この意味で、実はベッキー・シャープの英語辞典の場合に重なり合ってくるのである。

ジョンソンの受容をめぐるヴィクトリア朝出版文化のこのような素描から明らかになるのは、まず、18 世紀当時の出版文化とヴィクトリア朝のそれが、少なくとも、新しい読者層をめぐる大きく異なるものであつたこと、そしてそのことを考量せずに一般的な作品の人気を検討することは、考察の基盤を混乱させるものになりかねないということである。新しい読者層の出現は、そのこと自体、ヴィクトリア朝文学を考える上できわめて重要な問題である。だがそのことをもって、ジョンソンの、あるいは広く 18 世紀的文学伝統が有する価値観、倫理観、審美眼そのものの変容・変質と考えるのは、いささか性急であると思われる。ヴィクトリア朝にあつても、ごく自然にジョンソンの作品に親しんだ読者たちの声に、まずは耳を傾ける必要があろう。

3. ジョンソンを読む女性作家たち

実際、19世紀の女性作家たちの文章には、思わぬところでジョンソンへの言及が見られる場合が少なくない。「思わぬところで」というのは、それが、一般的に指摘されるようなジョンソン独特の倫理観の継承などといったものではなく、文章のリズムとか愛すべき物語といったごく日常的な読後感に根ざしたものである場合が多い、という意味である。そのことは、彼女らの言及が、主義主張の問題ではなく、作家としての言語感覚や文章感覚といった次元から自然に生み出されたものであることを示唆していると言えよう。

19世紀初頭に傑作を続々と発表したジェイン・オースティンがジョンソン作品から受けた一定の影響については既に先行研究が少なくないが、¹¹ その後も、例えば、シャーロット・ブロンテの文章などにも、ジョンソン作品のごく自然な愛読者の一人としての姿を指摘することができる。ギヤスケルが『シャーロット・ブロンテ伝』で指摘しているように、彼女は、親友エレン・ナッシーに宛てた1834年7月4日付書簡で、ジョンソンの『イギリス詩人伝』とボズウェルの『ジョンソン伝』を、読むべき伝記の筆頭に挙げているからだ。『ラセラス』もまた、彼女の作品に登場する。『ジェイン・エア』の第1巻第5章で、ジェインとヘレン・バーンズが初めて会話をする際、ヘレンはジョンソンの『ラセラス』を読んでいたのである。¹² もちろんこの場面でジェインは、『ラセラス』を愛読するヘレンの知性や情感を理解することができない。『ラセラス』なんて、私の眼にはつまらぬものに見えた。妖精もいなければ精霊も出てこない。文字がページにぎっしり印刷されているばかりで、何か変わった面白さがあるわけでもなさそうだし」というわけであり、そこには、キャサリン・ターナーが指摘しているように、ジェイン自身が、まだ『ラセラス』の価値を十分には把握するに至らなかったという意味と、しかし他方で、幸福の探求が実際には『ラセラス』最終章の「何ら結論のない結論」に至るというジョンソンの幸福感に対して、ジェインがいち早く挑戦しているという意味の二つを考慮することができるであろう。¹³ だが、『ラセラス』を読むヘレンと、先に触れた英語辞書を投げ捨てるベッキーとは、その性格造型や作品中での役割の点で、明らかに性質を異にする。ジョンソンの読書をめぐってブロンテは、ベッキーのような人物像を生み出す類の作家ではなかった。

ジョージ・エリオットもまた、ジョンソンの愛読者の一人であったと言えよう。彼女は、1872年のマライア・コングリーヴ宛書簡で、「私とルイスが今読んでいるものは、ちょっと古風かも知れないわね。なにしろ、ハイゼの新作なんか読まずに、

あの昔の愛すべきジョンソンの『詩人伝』を読んでいるのですから」と述べているし、1875年の出版者ジョン・ブラックウッド宛書簡では、「『ラセラス』よりも新しい話なんてしばらく読んでいません。『ラセラス』を読み返したのは二年前のことですが、子供の頃にこの作品を読んで感じた悦びがまた新たに蘇ってきました。当時、『ラセラス』は愛すべき友のような存在でした」などと記しているからである。¹⁴ 彼女が「子どもの頃にこの作品を読んで感じた悦び」とは、先に述べた新しい読者層を含むヴィクトリア朝の読者一般と多くを共有できるものでは必ずしもないであろう。彼女が生み出した作品のヴィクトリア朝における意義とは別に、である。作家の文章感覚と言うべきものに内在していたジョンソンと、マコーレーの言う「いささか陰りが見える」『ラセラス』の評判とを混同してはならない。

このようなジョンソン受容は、ギヤスケルの書簡にもうかがえる。例えば彼女は、1838年7月17日、義理の妹エリザベスに送った手紙の最後の部分に、「ジョンソン風に書いてみるから、大きな声で朗読してみてね」という一文をはさんだ後、次のような滑稽な一節を記している。

メナイの美しき水辺を旅して、透明なる流れの中で跳ね回るヒレのついた種族と戯れ、月の満ち欠けに支配された潮流に喜びを感じることができる者よ、そうして、先祖代々の家に戻り、このような生活によってこれ以上丸々と太ることもなければ、またこれ以上の過剰なる興奮に満ちた賞賛にふけるということもなく、人間とは到底考えられず、モルッカ種族とするにふさわしい、そのような者よ、わが文意を探るがよい、私には訳が分からないのだから。これで私の話はおしまい。¹⁵

この一節が、『ラセラス』の冒頭をなぞった戯文であることは明らかであろう。親しい義妹への手紙にジョンソン風の戯文を挿入してみせるギヤスケルの軽妙な調子には、旧来の伝統や価値を振りかざす権威としてではなく、むしろ親しみのある、好々爺然としたジョンソンの姿が髣髴としている。ギヤスケルにおけるジョンソン作品への言及は、こうしたジョンソンへの理解と情感を基礎にして検討する必要がある。

4. ギヤスケルの『クランフォード』とジョンソン

ギヤスケルの『クランフォード』は、1851年から53年にかけて、『ハウスホールド・

ワーズ』誌に連載された、彼女の傑作の一つである。¹⁶ ギヤスケル自身が少女時代を過ごしたチェシャーのナッツフォードを念頭に置いたと思われる架空の町クランフォードを舞台に、既に亡くなった牧師ジェンキンズの娘たちとその友人知己との日常的な交流を、この姉妹の友人であるメアリ・スミスが穏やかな口調で語るという体裁の小説である。

言うまでもなくこの『クランフォード』には、ジョンソンへの言及がしばしばみられる。第1章や第2章における挿話はもちろんのこと、最後の方でも、ジェンキンズ姉妹の末妹ミス・マティーが牧師館から引き上げる際に、聖書とジョンソン博士の英語辞典を持っていた、であるとか、インドから帰還したピーターとミス・マティーからの贈り物として語り手のメアリ・スミスが最上の装幀を施されたジョンソンの作品集を受け取るであるとかといった具合に、である。この作品におけるこうしたジョンソンへの言及の頻度には、やはり、ギヤスケル自身の意図を感じざるをえない。なぜ彼女はしばしば、ジョンソンを持ち出すのか。

『クランフォード』におけるジョンソンへの言及の中でも、きわめて印象的なのは、作品の冒頭近くで挿入される、一番上の姉ミス・ジェンキンズとブラウン大尉との文学談義の場面であろう。最近、娘たちを連れてクランフォードに移り住んだ大尉は、ある日、ミス・ジェンキンズのお茶会に招かれる。そこで彼がふと漏らしたディケンズの『ピックウィック・ペーパーズ』への賞賛をミス・ジェンキンズがとがめ、「あれはとてもジョンソン博士には及びません」などと述べたことから議論が始まるものの、ミス・ジェンキンズは大尉の文学観を認めず、ついには『ラセラス』の一節を朗読するに及び、「私はジョンソン博士の方がボズ氏よりも上だと思います」という彼女の断定の前に、大尉はやむなく引き下がる、というものだ。

この箇所をめぐるのは、既に多くの解釈がなされてきたが、なかでも代表的なのは、次の二つであろう。すなわち、一つは、このミス・ジェンキンズとブラウン大尉の論争を文学史的新旧交代論と見るものであり、もう一つは、ジョンソンの権威を振りかざすミス・ジェンキンズは、結局のところ、父親から受け継いだ父権的秩序を頑なに守ろうとする「悲しいパラドクス」でしかないとするもの、である。このうち前者については、実は夏目漱石がその『文学論』の第五篇第六章において、明快に論じている。強硬な姿勢を崩さないミス・ジェンキンズにもかかわらず、新旧交代の「戦争」の勝敗は明らかであるとする彼は、次のように述べている。

篇中のCaptainは新派を代表するもの、Jenkynsは旧派を慕ふもの、両人の会話

はその好む所に焦点を置いて相下らざるが故に、会話といはんよりはむしろ戦争なり。而してこの両人の戦争は即ち当時の集合意識の戦争に過ぎず。(中略) 推移の順序として、自然より旧を慕ふべく命ぜられたる少数もしくは多数の読書子は大勢の非なるを知らず、敗滅の必ずべきを悟らず、頑として落日を認めて天に中すとなす。¹⁷

社会の父権的秩序を守ろうとするミス・ジェンキンズを「悲しいパラドクス」でしかないとする評価は、例えば、パッツィー・ストーンマンの次のような指摘に見られるものである。

『クランフォード』にはジョンソン博士への言及がしばしば登場するが、それは次のような文脈で捉えられるべきであろう。すなわち、ミス・ジェンキンズは、ジョンソンの「声」を語ることで彼の権威に依拠できると信じているのだが、そのような「便乗的」フェミニストは、実際に権力を持つ人々の間ではまったく受け入れられないのだ。(中略) つまりミス・ジェンキンズは、悲しいパラドクスでしかないのである。なるほど彼女は意志が強く、他の人々に勝ってはいたかも知れないが、それは結局、彼女が父権的秩序に従い、その中に同化していたことを示すものにほかならない。¹⁸

だから当時の女性は、「自分たちが何者であるかによってではなく、何に属しているのかによって意味づけられている」というのがストーンマンの見解である。

両者の見方について、少し吟味してみよう。漱石をはじめ、ジョンソンへの言及を新旧交代論として読むならば、ミス・ジェンキンズの持ち出す『ラセラス』は旧派、ブラウン大尉の『ピックウィック・ペーパーズ』は新派で、この新旧の勝敗は既に明らか、というわけだが、ギヤスケルは、この論争をはたして新旧対立として描いたのであろうか。そうであるとすれば、なぜ、ブラウン大尉はその後まもなく世を去り、他方、ミス・ジェンキンズは最後まで、ミス・マティーらの心の中に生き続け、言及され、そして語り手のメアリ・スミスに至っては、最後に極上の装幀が施されたジョンソン作品集を贈られる、などという形で作品が展開していくのか。こうした新旧の対立が、一般社会において、また文学界においてさえも確実に存在したことは漱石の指摘する通りであろう。しかしながら、そのことと、この『クランフォード』でギヤスケルが発しているメッセージが同質のものであるとする見方には、

いささか無理があるのでないかと思われる。もう一つの、ミス・ジェンキンズを「悲しいパラドクス」であったとする見解にも、その妥当性について大きな疑問を感じないわけにはいかない。というのも、たしかに19世紀におけるジョンソンへの言及の内に、ある種の父権的な属性を読み取ることは、必ずしも不自然なことではないのだが、それではそのミス・ジェンキンズが作品全体を通して、常にパラドクスであったと言えるのかどうか。最後にピーターとミス・マティーからジョンソン博士の作品集を贈られるメアリ・スミスの語りは、それでは、全体として一つのパラドクスであり、それは例えば、頼りにならない語り手とでも言うべきものであったのか。あるいはまた、そういう父権的な属性に代わるものとして、ギヤスケルは、『ピックウィック・ペーパーズ』のディケンズを対置したと言えるのか——こうした疑問について、いずれも納得のいく説明を与えることはできないであろう。そもそも、たしかにこの『クランフォード』には、ジョンソンへの言及がよく見られるものの、しかしそれでもなお実際には、そうした言及は散発的なものであって、この作品全体を通して、例えばジョンソンの声が、あるいは『ラセラス』に見られる幸福探求のテーマが、一貫して鳴り響いているとは到底考えられないのである。

ブラウン大尉との論争の中でミス・ジェンキンズは、「ジョンソン博士の文体は、若い初心者模範なのです。私が手紙を書き始めた頃、父は博士の文章をよくすすめてくれました。博士の文章に沿って、私は自分自身の文体を作りあげたのです。あなたのお気に入りの作家にもおすすめします」と断言する。なるほどミス・ジェンキンズの口調には、ある種の威圧感があって、そこには、旧派の「悲しいパラドクス」としての彼女の特質を浮かび上がらせる要素も見られる。だが、そもそも『ラセラス』には、「手紙を書き始めた」頃の「若い初心者」が模範とすべき一通の手紙すら挿入されることはなく、また、『ラセラス』を執筆したものの、ジョンソン自身は終生、小説と呼ばれる新しい表現領域には少なからず懐疑的であった。ミス・ジェンキンズのジョンソンへの言及は、この意味において既にやや正確さを欠いていたのであって、彼女には、ジョンソンの『ランブラー』もまた定期刊行物として分冊形式で刊行されていたという事実を指摘するブラウン大尉の「低い声」は、まったく聞こえていないのである。ミス・ジェンキンズにせよ、彼女が言及するジョンソンにせよ、作品全体にわたって「悲しいパラドクス」と呼ぶにはいささか滑稽に過ぎるこうしたギヤスケルの扱いは、むしろ、義妹に送ったあの愉快的な書簡に見られる彼女自身の『ラセラス』との軽妙な関係性を想起させるものであろう。ミス・ジェンキンズを頑なな旧派、あるいは父権的社会秩序の実質的擁護者と考えるには

あまりに滑稽であり、しかもそれでいて、作品全体から読み取れるその愛すべき人物像への親近感には、漱石やストーンマンの指摘とは別のところにギヤスケルの意図が宿っていたと言えるのではあるまいか。

このような観点から、ミス・ジェンキンズの持ち出す『ラセラス』と、この『克蘭フォード』を比較してみると、実はある一つの、ほとんど唯一と言ってよい共通点があることに気づく。それは、諸種の出来事があまり急ぐことなくゆるやかに接続し、登場人物たちはそれぞれ個性を發揮しつつも作品の主筋はある特定の主人公に収斂せず、そういう流れの中で、まさに『ラセラス』最終章の小見出しが示しているような「結論のない結論」をもって一篇の作品がゆるやかに閉じられるという性格である。言うまでもなく『ラセラス』という作品は、そのタイトルにもかかわらず、主人公がラセラスであるのか否か、定かではない。実際、イムラックが教師として力を發揮する場面もあれば、そのイムラックがラセラスにやり込められるという場面もある。妹のネケイアの、それこそヘレン・バーンズ風の生き方が称揚される場面もあれば、侍女ペクーアの冒険譚に一同が聴き入るといったこともあったりする。そして「結論のない結論」がゆるやかにもたらされる——こうした作品構成は、ある意味で、定期刊行物であった『ランブラー』にも共通したものと言えよう。架空の町の名をタイトルとした『克蘭フォード』もまた、メアリ・スミスが神の眼を持った権威ある語り手として語るというわけでもなければ、際立った主人公の精彩に富む言動が作品を主導するというわけでもない。緊密に構築された虚構的世界が明解な結論へ向かって展開するというような小説作法とは明らかに異なる、いわばジョンソンの手法にギヤスケルが何らかの可能性を見出していたとすれば、彼女自身の心情や伝記的要素さえ体現しているとも言えるミス・ジェンキンズが執拗にジョンソンの『ラセラス』を朗読する場面もまた、実は決して不自然とは言えないのである。

5. まとめ

1768年春のある日、ジョンソンはボズウェルに、サミュエル・リチャードソンとヘンリー・フィールディングの作品を比較して、次のような見解を述べている——「両者の間には、時計の仕組みを知っている人間と、時計の文字盤を見て今何時であるかを言う人間ほどの違いがある」。¹⁹ パミラやクラリッサのような主人公の心理描写に没入し、一人称の語りによって心の襞を描き分けたりチャードソンは時計の仕組みの分かる作家であり、他方、神の眼を持ってすべてを俯瞰する権威ある

作者の先駆けとして物語展開の妙を示したフィールディングは時計の文字盤を見て今何時だと言う作家である、というわけだ。18世紀にあっては新たな表現領域であった小説が、その後にとどる道のりのいわば両極を、人物の心理描写とプロットの展開をめぐる手法の点から簡潔に指摘したのと言えよう。だが、ジョンソン自身の文筆活動は、『ラセラス』を含め、この両極のどちらにも与するものではなかった。その分かりにくさが、19世紀の新たな読者層にとっての違和感となり、例えば『ラセラス』という作品の19世紀における受容に「陰り」をもたらす要因ともなったことは否めないであろう。だが、リチャードソンとフィールディングを両極とする小説作法の、その間のいずれかの場所に、意識するとしないとにかかわらず自らの視点を置く作家にとって、ジョンソンの『ラセラス』のような作品は、その独特の倫理観や社会観とは別に、言語感覚や文章感覚といったレヴェルで、興味深い示唆を与えるものとなっていたのではあるまいか。19世紀の新しい読者層にはいささか不人気であったそのような作品にひそむ言語と語りの感覚が、しかし、19世紀の作家の創作工房の中で実は静かに継承されていた可能性を探る手がかりを、ギヤスケルの文章は豊かに有していると思われる。

注

本稿は、日本ギヤスケル協会第27回例会（2015年6月6日、於、静岡市産学交流センター）での講演に加筆修正をほどこしたものである。お世話になった学会関係の諸氏に、また、講演にコメントや質問をお寄せいただいた方々に、厚く御礼申し上げる。

1. ジョンソンを「ウルサ・マイヨール」と呼んだことで知られる文人には、例えばトマス・グレイがいるが、彼は総じてジョンソンに批判的であり、この呼称も皮肉を込めたものであった。ジョンソンを文壇の「中心的人物」としてのみ捉えることは、既に18世紀においても必ずしも適切とは言えないのだが、この点についての考察は別の機会に譲る。
2. Thomas Carlyle, “The Hero as Man of letters: Johnson, Rousseau, Burns”, *On Heroes, Hero-Worshipping and the Heroic in History*, Vol. 5 of *The Works of Thomas Carlyle* (London: 1897), p. 182 より拙訳による。
3. Thomas Babington Macaulay, *Life of Johnson*, ed. John Downie (London: Blackie, 1918), p. 45 より拙訳による。

4. T. S. Eliot, “Johnson as Critic and Poet”, *On Poetry and Poets* (London: Faber, 1957), p. 184 より拙訳による。
5. ノスタルジックな 18 世紀観は、当時の文学と社会の共存・共生関係を「公共圏」と捉える発想などともきわめて近い。この点については、原田範行『『公共圏』の秘密：18 世紀ロンドンとその文学的表象』（『十八世紀イギリス文学研究——躍動する言語表象』〈開拓社、2006〉、pp. 142-58）などを参照。
6. William Makepeace Thackeray, *Vanity Fair: A Novel without a Hero*, ed. Helen Small, (Oxford: Oxford UP, 1983), pp. 10-13 を参照。
7. 1842 年に創設されたロンドン英語協会では、設立当初から、New English Dictionary of Historical Principles の編纂が企図された。これが後の *OED* であり、その分冊刊行は 1857 年に始まっている。
8. 1860 年代の『ラセラス』の版本については、J. D. Fleeman, comp., *A Bibliography of the Works of Samuel Johnson* (Oxford: Clarendon, 2000), 1: 880-888 を参照。
9. 19 世紀における『イギリス詩人伝』（抄録版を含む）の出版状況については、J. D. Fleeman, comp., *A Bibliography of the Works of Samuel Johnson*, 2: 1394-1475 を参照。
10. アーノルドが『イギリス詩人伝』の抄録版編纂を企てた理由の一つは、「隠居生活に必要な資金を得るため」であったという。抄録版にこそ、それだけの需要が見込まれたという事情が見えてくる。Katherine Turner, “The ‘Link of Transition’: Samuel Johnson and the Victorians”, *The Victorians and the Eighteenth Century: Reassessing the Tradition*, ed. Francis O’Gorman and Katherine Turner (Hampshire: Ashgate, 2004), p. 122 を参照。
11. Robert Scholes, “Dr. Johnson and Jane Austen”, *PQ* 54 (1975): 380-90 や Claudia L. Johnson, “The ‘Operations of Time, and the Changes of the Human Mind’: Jane Austen and Dr. Johnson Again”, *MLQ* 44 (1983): 23-38 など を参照。
12. Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, ed. Margaret Smith (Oxford: Oxford UP, 2000), pp. 49-50 を参照。引用は拙訳による。
13. Katherine Turner, “The ‘Link of Transition’: Samuel Johnson and the Victorians”, pp. 124-25 を参照。
14. *The George Eliot Letters*, ed. Gordon S. Haight (New Haven: Yale UP, 1954-78), 5: 238 および 6: 123 より拙訳による。エリオットについては、1872 年に *Wise, Witty, and Tender Saying in Prose and Verse Selected from the Works of George Eliot* という名文集が出版されているが、この編者アレグザンダー・メインが、1874 年には *Life and Conversations of Dr. Samuel Johnson* というジョンソンの言行録を出版していることも興味深い。ギヤスケルの『シャーロット・ブ

ロンテ伝』(1857)とともに、19世紀におけるジョンソンの受容と伝記文学の系譜を考える手がかりになるからだ。

15. *The Letters of Mrs. Gaskell*, ed. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (Manchester: Manchester UP, 1966), p. 21 より拙訳による。
16. 『克蘭フォード』からの引用は、すべて Elizabeth Gaskell, *Cranford*, ed. Elizabeth Porgers Watson, (Oxford: Oxford UP, 2011) より拙訳による。
17. 夏目漱石『文学論』(1907) (岩波文庫、2007) の下巻 318-19 頁による。
18. Patsy Stoneman, *Elizabeth Gaskell* (1987; Manchester: Manchester UP, 2006), p. 58 より拙訳による。
19. James Boswell, *The Life of Samuel Johnson, LL.D.* ed. George Birkbeck Hill, rev. L. F. Powell (Oxford: Clarendon, 1934-50), 2: 49 より拙訳による。

(東京女子大学教授)

Abstract

Johnson in Gaskell:
Diction, Narrative, and Print Culture

Noriyuki HARADA

In the first chapter of *Vanity Fair*, Becky Sharp flings without hesitation a copy of Johnson's *Dictionary* into the garden of Chiswick Mall. This memorable scene well reminds us of the unpopularity of Johnson's works among Victorian readers. However, if we take it into consideration that the copy of the *Dictionary* Becky actually flings is supposed to be an abridged version that has been altered by editors till it can scarcely called Johnson's, and the contemporary intellectual society started editing a full-scale English dictionary (later *OED*) based on Johnson's original version, we find that Victorian readers came to be divided into two groups of people: the one who, like Becky, did not have any interest in Johnson's works and the other who carried on his literary achievements. In fact, when we read the works and letters of some Victorian novelists like Charlotte Brontë, George Eliot, and Elizabeth Gaskell from this point of view, we can point out in their writings a variety of Johnson's influences that are sometimes hidden behind the texts. In particular, Gaskell's references to Johnson are of special interest. For, she comically borrows his diction in her letters, mentions *Lives of the Poets* as one of Charlotte Brontë's favourites, and actually uses his *Rasselas* and other works in *Cranford*. In this paper, with special reference to *Cranford*, Gaskell's way of narrative is examined; the narrative in which characters and events are described in a gentle progress of the story is typical in her novels, though it is clearly different from the dramatic development of the plot among the contemporary popular novels. Through the examination, we can say with fair certainty that the characteristic way of Gaskell's narrative shows her familiarity with and reliance on Johnson's works.